

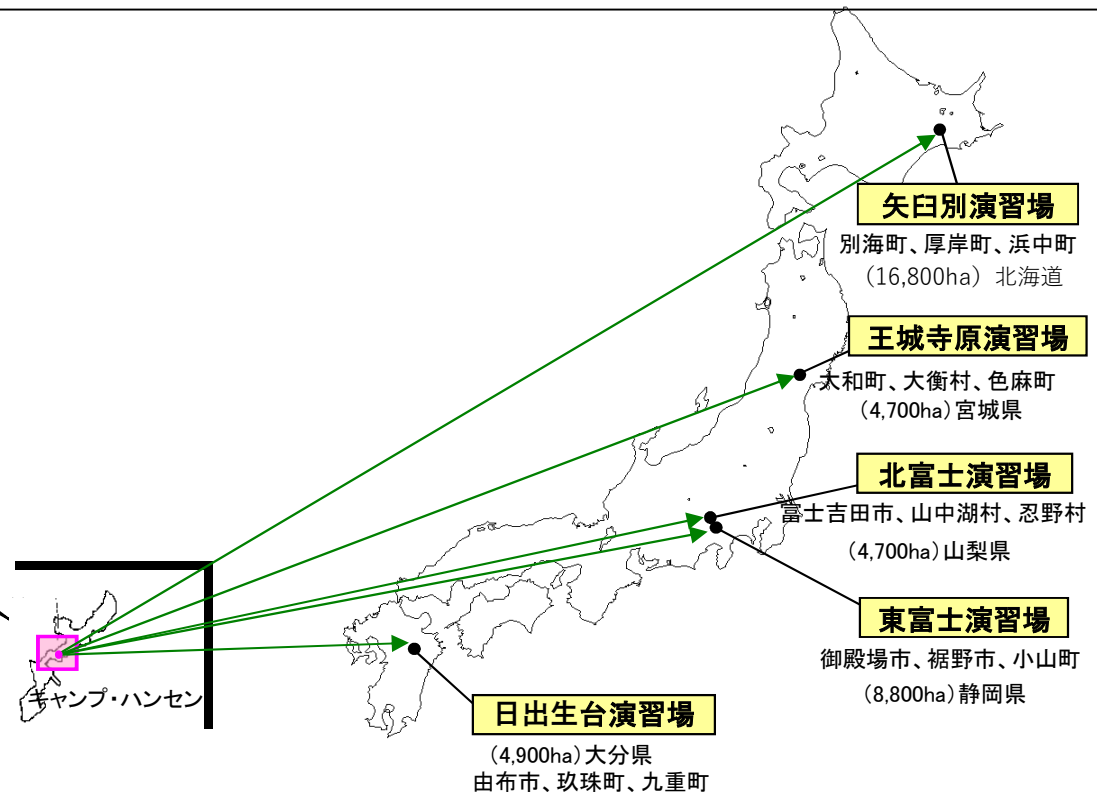
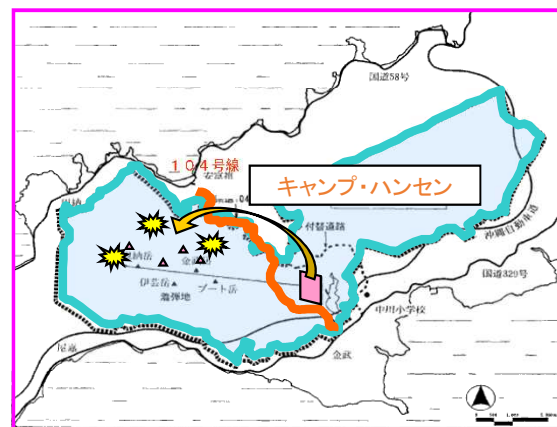
104移転訓練における砲陣地防御訓練で使用する火器の見直しについて

防 衛 省

令和7年12月

県道104号線越え実弾射撃訓練の分散・実施について

- SACO最終報告に基づき、在日米軍施設・区域が集中している沖縄県の負担軽減を図るとの考えのもと、沖縄県道104号線を封鎖して実施していた実弾射撃訓練を、1997年以降、本土5演習場(矢臼別、王城寺、北富士、東富士及び日出生台の各自衛隊演習場)に分散して実施しています。
- 104移転訓練は、155mm榴弾砲の実弾射撃訓練が中心ではありますが、それと一体のものとして、砲の展開訓練や砲陣地防御訓練(※)等が行われ、これらが一体となって初めて訓練が完結し、砲兵部隊の機能が維持されます。
※敵対勢力から攻撃があったことを想定し、榴弾砲陣地の防衛のために一般的に用いられる火器を使用した実弾射撃などをいいます。
- 104移転訓練を開始した1997年以降、本土5演習場においては、155mm榴弾砲による実弾射撃訓練と対人小火器による射撃体勢のみの砲陣地防御訓練を一体として実施し、2006年度からは、**155mm榴弾砲射撃訓練と対人小火器による実弾射撃を伴う砲陣地防御訓練を一体として実施**しているところです。



104移転訓練における砲陣地防御訓練で使用する火器の見直しについて

○ 今般、米側から、

- ① 近年のアジア太平洋地域の安全保障環境の変化に伴う米海兵隊の即応性の高まりを受け、各部隊の訓練所要が増大し、これまでに比べ、より効率的かつ効果的に訓練を実施する必要がある
- ② 現在、**155mm榴弾砲による実弾射撃訓練と対装甲車両火器による砲陣地防御訓練を別々に行っており**、即応性の維持に支障が出ている
- ③ より効率的かつ効果的な訓練を実施するため、1996以前から現在もキャンプ・ハンセンで実施している対装甲車両火器による砲陣地防御訓練を、本土5演習場で行われる155mm榴弾砲による実弾射撃訓練と一体のものとして実施したいとの説明がありました。

○ 防衛省としては、我が国を取り巻く安全保障環境が一層厳しさを増す中、在日米軍の安定的なプレゼンスを支えるとともに、日米同盟の抑止力・対処力をより一層効果的に強化していくことが必要であるとの認識のもと、

104移転訓練において、対装甲車両火器による砲陣地防御訓練を本土5演習場で実施することは、

- ① 訓練の効率的かつ効果的な実施が可能となる、
 - ② 更なる沖縄の負担軽減に資する、
 - ③ 訓練の日数や部隊規模を定めた1996年の日米合同委員会合意に変更はないため、1996年の日米合同委員会合意にいう「同質・同量」に反するものではない、
- と考えております。

こうした考えの下、地元の皆様の御理解を得たうえで、今後、本土5演習場において、104移転訓練の一体のものとして、**対装甲車両火器による砲陣地防御訓練を実施**させていただきたいと考えています。

2006年度～現在まで使用している火器(対人小火器)



M9拳銃



M16小銃



5.56mm機関銃



7.62mm機関銃



12.7mm機関銃



40mmてき弾銃



新たに使用する火器(対装甲車両火器)



60mm迫撃砲



81mm迫撃砲



84mm MAAWS (ロケットランチャー)



84mm AT-4 (個人携帯対戦車弾)

【参考】対装甲車両火器の諸元

【60mm迫撃砲】



【諸元】

- ①種 別: 軽迫撃砲
- ②口 径: 60mm
- ③砲身長: 1,000mm

【性能】

- ①砲口初速: 213m/秒
- ②有効射程: 70～3,490m
- ③発射速度: 20発～30発/分

個人携行可能な迫撃砲で、兵士1名での使用も可能。米陸軍中隊、米海兵隊小隊に配備

【84mm MAAWS】



【諸元】

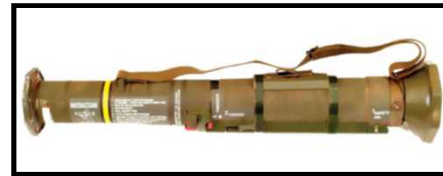
- ①種 別: ロケットランチャー
- ②口 径: 84mm
- ③砲身長: 1,065mm

【性能】

- ①砲口初速: 240m/秒
- ②有効射程: 250～1,300m
- ③装弾数: 1発

海兵隊兵士自身が携行できる多用途火力支援兵器

【84mm AT-4】



【諸元】

- ①種 別: 個人携帯対戦車弾
- ②口 径: 84mm
- ③砲身長: 1,016mm

【性能】

- ①砲口初速: 285m/秒
- ②有効射程: 300m
- ③装弾数: 1発

対戦車用の単発使い捨て無反動砲。

【81mm迫撃砲】



【諸元】

- ①種 別: 迫撃砲
- ②口 径: 81mm
- ③砲身長: 1,280mm

【性能】

- ①砲口初速: 225m/秒
- ②有効射程: 100～5,650m
- ③発射速度: 20発/分

81mmクラスの迫撃砲としては、ずば抜けて軽量、分解し、人力でも運搬可能

【参考】1996年以前にキャンプ・ハンセンにおいて実施されていた実弾射撃訓練について

- 1996年の日米合同委員会合意において、移転される訓練は、(当時)キャンプ・ハンセンで実施されていた訓練と「同質・同量」とする旨規定されております。
- 当時、キャンプ・ハンセンで行われていた「155mm榴弾砲による実弾射撃訓練」について、米側からは、
 - (1) 1回あたり3～4日の訓練を年間10数回、延べ30数日程度実施していた。
 - (2) 射撃の射程を確保するため、訓練の都度、沖縄県警が沖縄県道104号線を通行止めし、同県道を挟んで射撃を実施(※1)していた。
 - (3) 「155mm榴弾砲による実弾射撃訓練」と同時期に、「対人小火器及び対装甲車両火器(※2)による砲陣地防御訓練」を一体のものとして実施しており、これらの訓練は、1996年の日米合同委員会合意にいう「同質・同量」である。(※3)との説明を受けています。

※1 人員規模:大隊又は中隊規模

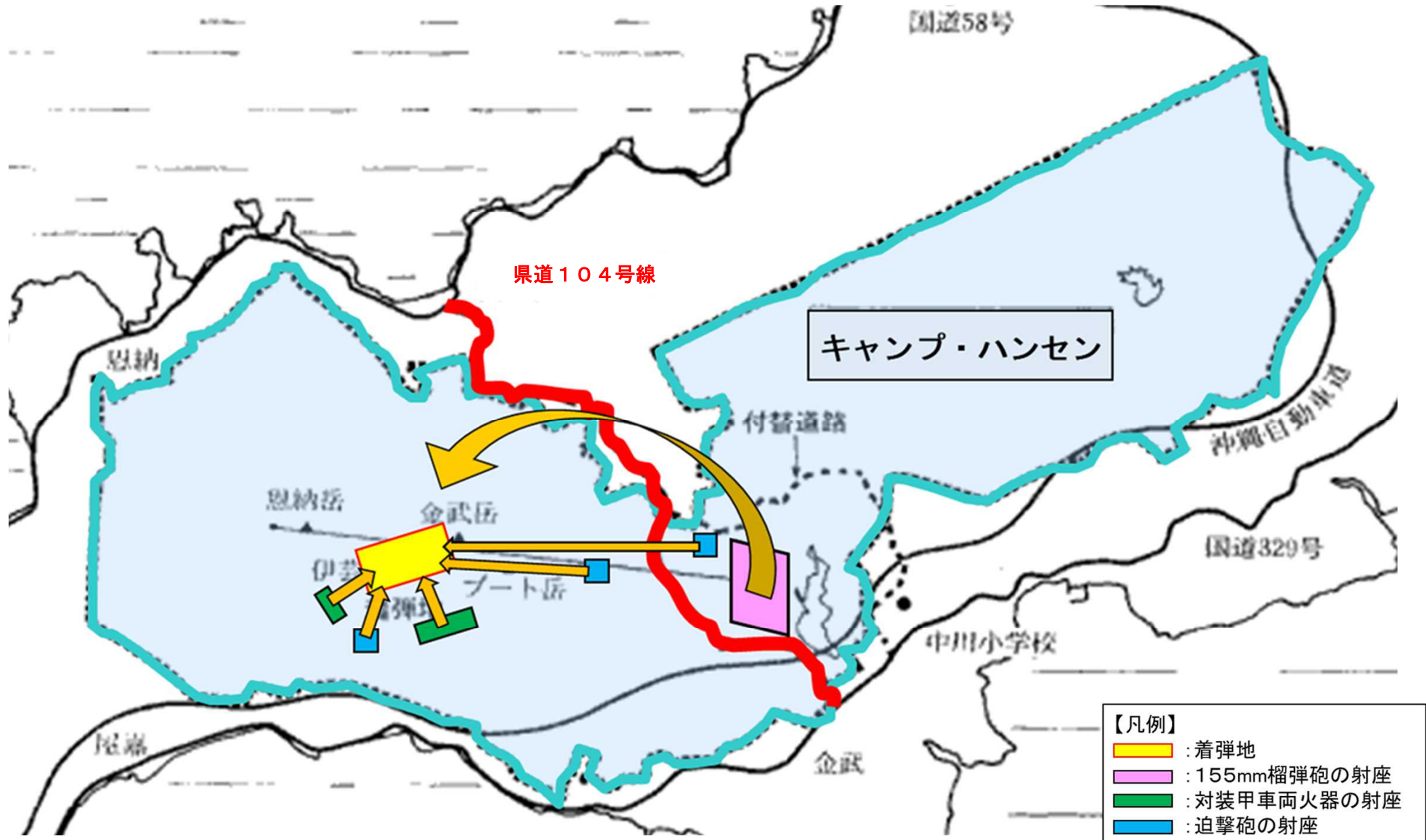
※2 現在、使用している対人小火器及び対装甲車両火器は次のとおり。

対人小火器:M9拳銃、M16小銃、5.56mm機関銃、7.62mm機関銃、12.7mm機関銃、40mmてき弾銃の6種類

対装甲車両火器:60mm迫撃砲、81mm迫撃砲、84mmMAAWS(マーズ)、84mmAT-4の4種類

※3 演習場の形態の特性上、射程距離の異なる「155mm榴弾砲」と「対人小火器及び対装甲車両火器」は、それぞれ別の射場で射撃

【参考】1996年以前のキャンプ・ハンセンにおける実弾射撃訓練イメージ



【参考】火器の見直しに伴う騒音等への影響について

日数・規模

- 対装甲車両火器による砲陣地防御訓練を実施する場合でも、射撃日数は、1996年の日米合同委員会合意により年間最大35日間と定められており、訓練日数に変更はありません。
- また、米側からは、155mm榴弾砲による実弾射撃訓練に参加する射撃部隊は、同合意にいう「最大規模で約300名強」を維持するとの説明を受けております。

騒音

- 騒音の影響については、地形や気象条件などによっても変化するため一概に述べることは困難ですが、例えば、今年度に矢臼別演習場で実施した①米海兵隊の155mm榴弾砲による実弾射撃訓練、②陸上自衛隊の81mm迫撃砲による射撃訓練について、同一測定地点におけるL_{den}の値の騒音比較は次のとおりです。

①155mm榴弾砲による実弾射撃訓練・・・71.2dB ※104移転訓練の実弾射撃訓練期間中の最大値(6月10日)

②81mm迫撃砲による射撃訓練・・・・・・35.4dB ※同一測定箇所における81mm迫撃砲の射撃訓練日の騒音値(7月28日)

	6/8	6/9	6/10	6/11	6/12	6/13	6/14	6/15	6/16	6/17	～	7/28
A地点	-	-	71.2	53.1	40.9	61.2	69.8	-	39.4	-		35.4
B地点	38.1	-	54.7	28.8	-	41.3	57.3	-	51.3	-		42.0

令和7年6月8日～17日(うち6月15日を除く):104移転訓練の射撃期間

令和7年7月28日:陸上自衛隊による81mm迫撃砲の射撃訓練

※上表は、北海道防衛局が矢臼別演習場周辺に設置している自動騒音測定装置による測定結果を引用したもの
また、日ごとのL_{den}の値(dB)であり、1回の砲撃音の実測最大値(dB)とは異なる。

安全性

- 実際に対装甲車両火器による砲陣地防御訓練を行う際には、各火器の能力や射撃方法等を自衛隊が確認し、しっかりと安全を確保した上で当該火器を使用することとしております。

(参考情報)

- ・4種火器のうち、60mm迫撃砲及び81mm迫撃砲は、自衛隊も保有しております。また、84mmMAAWS(マーズ)及び84mmAT-4については、類似の装備品を保有しています。
- ・各演習場において、陸上自衛隊による81mm迫撃砲の使用実績を確認済み。
- ・東富士演習場においては、米海兵隊による対装甲車両火器(4種全て)の使用実績を確認済み。